

眞生

第九卷 第六號

- 世には自らよいと信じたことも、若も失敗したらと云ふのでそれやれない人があり、或はまた、自分の不徳だと云ふところから折角よいと信じたことも、之を遠慮してやらぬ人があります。
- 乍然それも程度の問題ではありますが、あらゆる方面から考へて自らよいと思つたら、寧ろ之を斷行するのが本當の道ではないかと思ふのであります。
- それに若もこんな考へで私共があるならば、今日のやうな不完全なる私共におきましては恐く之でよいと云ふやうな完全な考への來ることは永久にないと思ふのであります。
- 若しも此の意味に於て永久に其の時期が來ないならば、とうとう私共の一生は何事も爲さずして終るではありませんか。それでは何等の生きがいもないことになりませう。
- だから私共は自ら信じてよいと思つたら、進んで之をやるべしだと思ひます。そこに少々の欠点がありましても、それは止むを得ぬこととあります。
- それに今日の人類は未だ完全なものではないのであつて、目下進化の道程にあり、常に向上を必要とする限り、私共の生活にも何にかと至らぬ点の多いのは之また當然のこととあります。
- 従つて、私共は豫め此のことを承知して、自らよいと思ふことは進んで之を斷行すべきであります。そしてそれから來る色々の欠陥はその都度之を改むればよいのであります。（念）

目次

太陽 尅子

光り 尅子

道德思想の變遷 土屋 觀道

念佛の種々相 土屋 觀道

日記中より 故 藤村 健三

吾朋便り

太陽

▽信仰を得た——と云つて何を待たのでせう。得たと思つた時、すゝと過ぎ去つて逝くのだから、「得た」と思つてゐる信仰でなく、「得てゆく」信仰でなければなりません。

▽もう一歩々々自分の生活を改善してゆく、もう一歩々々自分の商賣を正しくして行く、その一刹那々々がお念佛でした。口ではお念佛を申してゐても仲々志までお念佛になつてゐる。こゝは妙いものです。本を讀んでも本の中からは信仰は産れて来ません、話を聞いても話の中からは信仰は出て来ません、たゞ自分の生活を反省して行くところ、その反省の中、生活の中から「信仰」が泌み出して来ます。

▽山路の傍でシク／＼湧いてゐる泉、あの泉のように僅かづつ、「自分」の中から滲み出して来たものがいつかはなしに絲を引いて「流れ」になり、山を下つて田圃を潤はし、一家を擧げ人畜を救つて行きます。要は今、求め／＼でシクシクと清水が湧いてゐるでせうか、此の内から「湧くもの」がないから生氣がないのです。輝きがない、活氣がない、熱心がないのです。「本心の煌き」貫く意氣がないから、因襲と模倣の中に墮在してゐるのです。

▽信仰は朝日の中からズン／＼と昇つて行くように、自分の生活がだん／＼高く、だん／＼大きくなつて行くことであります。そして自分の正態がだん／＼人澤山の人々から仰がれ見られると共に、だん／＼澤山の人々を照らし、勢ひづかせて共々に精氣ある極樂を莊嚴して行くことであります。これは決して空想でも大言壯語でもありません、少くとも一家に於て自分が「昇りゆく太陽」になつてゐるでせうか、どうでせう。(尅)

光

□お寺へ行く老爺さんや婆さんばかり詣つてゐる、お説教と云へば死んでから先き、極樂詣りのお話しばかりである。我々には死んでから先きの話ばかりでなく、もつと手元に澤山の問題がある。年取つて働けぬようになつてからする信仰でなく、働ける者、働かんならぬ者が、一層眞實に働けるようにならして貰ふが爲めの信仰が、本當の信仰であるように思ひます。

□見上ぐるばかりの大きなモートルでも、電力を通すれば忽ちアーンと廻轉し初めるように、私達の此のモートルが廻轉せぬさいふのは、本當に電力を感應して居らぬからであります。一度「天地のみ力」「み恵」に感應したら何万馬力と云ふ大電力を發電します。

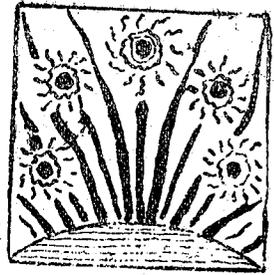
□「法」は宇宙に満ち充ちてその力を無限に、あらゆる物の上に透つて居られます、そのみならず如何なる方面に如何に進むべきかといふ指針をも示して居られます、本當に我々は「力」と「眼」その二つを大法より恵まれてゐる譯であります。

□此の「法」に一度感應したら、その法の作用を受けて自分も「法の働き」を發揮して来ます、此の法の「ハタラク」が信仰であります。法のはたらきとはどういふ事をいふのでせう、味噌屋が味噌を搾り賣りする、散髪屋さんが人の頭をチョキ／＼やる、是れ法の活動であります。人間が法になつて、法に働かざる、如法の活動であります。「佛作佛行」とは、ちと言葉が大きいから知らんが、本當に自己の活かざる、途、生きて行く可き道を自覺して、その道に全分努力さして貰ふことは、そのまゝ、往生の大義であり、眞生の大道であります。

□信仰は此世を捨て、あの世の事ばかりを憧れてゐる事ではなく、宇宙大の心と力を以て現在の活く可き道に全分生きることであります、自分の今やるべき事をやり遂げて行くより尊いことはありません、儲けた金も置いて死んでゆく、貰つた爵位も置いて死んでゆく、眞に不滅なるものは「價値」であります。「人格の光り」であります。自己の上に正しい、大きい、立派な「光り」を添へ得た者が一番の成功者であります。

□此の「光り」は商賣を精出すこと、人の爲めにも骨折つた事、その事が直ちに自分の「光り」であると共に社會への「光り」であります。單に金を溜めるがための稼ぎではなく、「光り」となる稼ぎをして行きたいのであります。

(尅子)



道徳思想の變遷

土屋 觀 道

一

□ 私たちばかりでなく、生きとし生けるものは、一として自己の生命を大切にせないものはありませぬ。従つて、多くの生物の生活状態を見ますと、一としてその生活の形式に於て、自己の生命を維持するのみに、其の全力を注がぬものではないのであります。

□ 中には自分の生命を保護するどころか、自分の團體の爲めにはその生命を鄭つてまで、之に仕へるものがありますが、それも亦自己の屬する團體の爲めに奉仕すべきであると云ふ説も立たぬことはありません。

□ 之を以て、之を見れば一体私共の生活は自分自身の爲めにすべきでありませうか、それとも私共の生活は自分自身の生活を忘れて社會全体の爲めに爲すのが本當でありませうか。

□ このことは従來の考へ方によると、自分の生活を捨て、社會の爲めに盡すことを以つて善となし、自分のことの爲めに社會を省みないのであるを以つて惡となしたやうであります。未だそれが何の爲めで

あるかを明にしたものがないやうであります。

□ 中には自分のことをのみを爲して社會を省みないのであるは蓄生の生活であつて、自分を忘れて社會の爲めのみを計るのを神のやうな生活として之を賞揚するやうであります。自分の身を省みず社會の爲めに其の身を犠牲にするものは必ずしも神のやうな人ばかりではないのであります。

□ 即ちそれは考へやうでありまして、自己を忘れて社會の爲めにその身を盡すことは蜜蜂とか蟻のやうな集團生活を營む動物の中にも之を見るのであります。またその必要を見る元始時代の民族の中にも特に此の現象を多く見るのであります。

□ して見ると、特に自分の身を社會の爲めにのみ盡すと云ふことを以つて、尤も優れた人間特有の社會道徳であるとのみは云はれないことになるのであります。

一一

□ 殊に今までの社會道徳なるものは自分の身を捨て、社會の爲めにすることを最高の社會道徳のやうに考へられて來たのであります。ともすればそれを以つて或る一部階級の御都合のみに利用せられた點さへあつたからであります。

□ 即ち一例を以て之を示せば封建時代に於ける、忠孝仁義の如き、其のすべては申しませんが、ともすればかうした社會的奉仕の言葉の中に、多くの民衆を犠牲にして、其の利を一人で占有してゐたものが無かつたのではありませんでした。

□ そして、それは多くの場合、下より上に盡すべき強られた道徳でありまして、君には忠を盡せ、親には孝を盡せと云ふやうな教へでありまして、君より臣に盡せとか、親より子に盡せとか云ふ教へは殆ど無かつたと云つてもよいのであります。

□乍然そのよつて來るところを見れば之等の道德なるものは主として、上のものより下のものへの強いられたる道德が多いのでありまして、所謂強者の弱者に求めた道德に外ならぬのであります。

□尤も、弱者の強者に對する要求も全く無つたのではありません。乍然それは決して強者の入るゝところとはならぬのでありますから、何れの時代にも弱者が強者に強ゆる道德とてはあり得ないのであります。従つて、今までの道德と云ふものは多くの場合いつも弱者が強者に強いられたものが多いのであります。

□然し、こゝに強者の道德と申しましたが、それは必ずしも、個人個人の場合ばかりでなく、時としては個人對個人の外に、個人對社會や、社會對個人や、社會對社會もあり、又個人對國家や、國家對個人や、國家對國家などもあるのであつて、さう一概には云へぬ場合もあります。

□従つて、かうした私共の社會生活の問題も、そこには色々の道德關係が複雑してゐるのであります。一概に云へない場合が多いのであります。

□従つて、道德の起原とその變遷とは其の民族の社會關係に於ける發展の歴史的關係にもよるものが多いのでありまして、世界各國が皆一樣に今日にあれとは云へぬものが多いのであります。

三

□乍然、社會一般の道德的立場から云へば其の道德的生活の標準は人類の生活は個人の自由と正義と博愛とがすべての上に主張せられて、個人の獨占と不正と利己主義とが到るところに非難せらるゝやうになつたのであります。

□而て此の傾向は所謂強者の弱者に求むる道德的要求にあらずして、弱者の強者に求むる集團の要求と云ふべきであります。

□即ち嚴密なる言葉を以つて之を言へば弱者の團結が一二の強者の力を壓して之を要求するものでありまして、所謂上流の壓迫に反抗する一般民衆の力であると申してもよいのであります。

□この意味に於て、力は道德なりと云つた古人の言葉がいかにも面白いと思はれる點もないではありません。そして、昔から今日に至るまでの道德思想の内容とその形式の變遷とを調べればあまりにもそれが當つてゐるのを反對することができぬのであります。

□乍然、それだからと云つて、若も力を以つて、社會の道德を個人の私有にすることができるのであると思つたら、それこそ大いなる誤りであつて、社會は決してそれを以つていつまでも治まるものではないではありません。何となれば單なる個人の力のみが社會の道德を形成するものではないからであります。

□従つて、眞實の道德は其の社會に於て一般民衆の生活を助くるときに於てのみそれが永く民衆の上に於て支持せられるのでありまして、民衆の力はいつまでも其の強いられたる道德を支持するものではないからであります。

□従つて、其の強いられたる道德と云ふのも其の當初に於ては決して單なる強いられたものではなくして、其の實はさうすることによつて、初めて其の社會全体の生活が支持せられる必要から起つたと云ふべき點も多いのであつて、社會的には必ずしも之を非道德とは見なかつたやうであります。

□此の意味に於て、今までの道德も社會民衆が之を支持しなくなればその効力を失ふに至るのが常であります。而て、其の社會民衆の力が之を支持すると云ふのは即ち謂かへれば其の民衆の自覺とその力が其の強力者の上に現はれて來た處に、民衆生活の安定を中心として起つて來たのであります。

□此の意味に於て、從來の民衆は所謂常に強いられたる道德の中に生活せられたことが多かつたのであります。乍然力なき多くの民衆は未だそのことを知らずして、強いられたる道德の中にさうした道德を守ることがを以つて最も正しい道德家であるときへ考へさせられてゐたのであります。

□然にこゝに注意すべきことは果して以上のやうな道德が今日も尙正しい道德であらうかと云ふことでありませぬ。何となれば今日の實際社會の一部にはそれを以つて本當の道德でないとする人も現はれて来たからであります。

□そして、今やそれらに對する一つの道德的の一大革命が今日の社會に現はれて来たことへ思はれるからであります。それは資本主義に對する社會主義の思想信仰の勃興であります。

□こゝに社會主義と云へば一面その主義の何たるかを知らない人は多くの場合之を直に危険思想であると思へてゐる人もあるのであります。今私の言はんとする社會主義は決してそんな意味での社會主義を云ふのではなく、所謂今日の資本主義に對する社會主義を云ふのであります。

□乍然我が國ではまだ封建制度が倒れてからまもないので、其の實は封建思想の遺風と之に對する資本主義思想の戦があり、また一面には資本主義思想と社會主義とが闘争の中にあるやうな有様で、此の間の社會道德を一般民衆の上に確立することは甚だ困難な立場にあるかと思はれるのであります。

□何となれば社會の道德なるものは社會と共に随時に變遷すべきものであつて、必ずしも永劫に變らないものではないからであります。

□從て、同じ民衆と申しましたが、今日の我が國に於ては未だ封建的思想や生活を以て自分の生活に都合よい社會階級の人もあり、又資本主義的社會生活を以つて、自分の生活を都合よしと感じてゐる階級もあり、又之に反して社會主義的社會生活を以て最も自分の生活に都合よしと考へてゐる社會階級の人もあるからであります。

□乍然さうは云ふものゝ、其の實今日の社會状態はその中に於て何れが最も其の勢力を以つてゐるものであり、そしてまた、その中に於て其の勢力何れの方向に向つて進展しつゝあるのであるかを考へたとき、私共は必ずしもそれを知るに難からぬものがあるやうであります。

五

□然ばその趨勢は何れに向つて進みつゝあるでありませうか、少くとも今日までの社會の状態は封建制度が倒れて資本主義制度となり、今やその資本主義制度が行き詰つて、社會主義制度が段々と加味せられて来たことは事實であります。

□從て、それと同時に、否むしろそれよりも一步先きにと申した方が本當であります。今や單なる封建思想なるものは封建制度の崩壊と同時に一般社會には時代遅れとなりましたが、それと同時に、今や一般民衆の心の底には所謂資本主義的な考へや其の思想も己に排撃せられるやうになつたのであります。

□此の意味に於て少くとも今日の大勢は資本主義の横暴と同時に、之に對する民衆の生活困難はそれに應じて社會主義的社會制度の進展を喜ぶものゝ多いことは云ふまでもありません。

□而て、其の社會主義なるものゝ思想信仰の勃興は一体どこから起つて来たかと云ふに、これは即ち民衆の大勢から要求せられて来た民衆の力でありまして、決して資本家の慈善心から起つて来たものではありませぬ。

□即ちそれは恰も資本主義制度が封建思想から起つたものでなくして、之に反する資本主義思想から起つたやうに此の社會主義思想も資本主義思想から起つたものではないのであります。

□乍然今日の社會主義思想なるものが果していかなるものであると云ふ點にづきましては更に一步の研究を要するものがありまして、所謂一般の社會主義なる言葉とマルギズム的社會主義とは充分に考究すべきものがあるかに思へるのであります。(三〇、四、三)

一、念佛が有難くない

- 「近頃私は念佛申しても一向に有難く感ぜられなくなりました。こんなことでよいものでせうか。」
- 「それはあなたばかりではありませんまい。私なども、時々そんなことがあつて困ることがありますよ。」
- 「あなたのやうなかたも、やつぱりさうですか。私はまた、あなたなどはさぞ御念佛も有難いことだらうと思つて居りましたのに、して見るとお念佛は必ずしも有難いときばかりとはないものですね。」
- 「私も初めは有りがたい感の時ばかりでありました。而も私自身がその喜びの中にゐたものですから、たまに或る人がお念佛が有難く感じられないなごと申すのを聞くと、それは信仰がないからだと直ぐ云つたものでした。ところが、それが一年たち二年たちしてゐるうちに、私の念佛にもそれが有ることに氣つくやうになりました。而もそれが有難くないばかりか、時によると念佛申すのがいやになる時さへあるではありませんか。之ではいかぬと思つても仕方がありません。又時々御別時なごして、一生懸命になりたいと思つても

その有難さを取り返すこともできぬさきがありました。

- 「實は今の私がそれなのです。近頃自分の無信仰からとはいへ、全く困り抜いて居ります。それも外のこととは違つてあれほご喜んでゐた私でありませう。それが近頃全く念佛がいやになつて來たのですからね、實は宗教家として人の手前も相濟まぬ次第であります。従つて、今はその爲めに反つて苦しめられて居ります。」
- 「而もそれが自分に對してと云ふよりも他人に對してでありませう。あれほご自分の信者や友だちに念佛の有難さを主張してゐた手前、今更ら念佛するのがいやとあつてはそれらの人に對しても全く面目がないからですはね。然しそれ位なら、今まで通りに念佛すればよいのに、それはまた仕事之急がしくてそれもやれぬと云ふでせう。」
- 二、暇はあつても
- 「ところが念佛申す暇がないと云ふのはありません。近頃は此の不景氣で録に仕事もないのですから、

ゆつくりと念佛申す暇がないなごとは云へないので。朝から晩まで毎日ぶらついてゐる位だから終日念佛してもよいのです。然に愈々念佛となつて來ると、さうもそれが時間が惜しいやうな氣がしてゆつくり念佛する氣になれないのです。」

- 「それは困つたことですね。然し何ぜに念佛がそんなにいやなのでせう。念佛がそんなにいやなものならばさうして以前はあんなに念佛が有難く申せた事ではなう。」
- 「そのことについては私もさうしたことかとあきれてゐます。之は結局私の無精の結果だと思ひます。」
- 「或はさうかも知れませぬ。然し之ではいかぬと随分自身をせめて見ても、此の身が自分の言ふことを聞かぬときがあるではありませんか。」

- 「いや、此の身ばかりではありませんよ、全く私の此の心そのものが近頃の私には全くあきたらぬので困つてゐます。之ではいかぬと知りながら、それでも自分の心のごこかにはごこかにそれでも仕方がないなあと云ふやうな意け心がありまして、殆ど困りぬいて居ります。而もさうかと思ふと、それでゐてそれがさうまで困つてもゐないやうな處があつて、中ぶらりんの自分であるのです。一そのこと今少し困つたならばよい

のでせうが！それもないのですよ。いはゞへびの半殺し見たやうで、自分自身にも困つて居ります。」

- 「だから本當に念佛も出ないのですよ。つまるところ、自分がまだ本當に困つてゐないからなのでせう、かと云つて之以上困るのも亦困つたものですね。」
- 「さう云はるれば全くそれに違ひありません。いまは全く困まれないところに困つてゐるのです。」
- 「でも何と云ふだらしない困り方でせうね。だからあなたの念佛が有難く申せないのも全くその爲めですよ。念佛は本當に困らない人には或は申せぬのが本當かも知れませぬね。」
- 「さう云はるれば全くそれに違ひありません。それで私は今少し、何にかで困つたらよいがと思ふことがありますよ。」
- 「然し若しも念佛が困つたときしか出ないとすれば念佛する爲めには常に困らねばならぬことになりませうか。それでは念佛と生活とが常に矛盾するではないでせうか。」
- 三、困つたとき
- 「さうすると念佛は困つたときだけ申せばよいと云ふことにもなりますね。従つて困らぬ家庭には念佛はいらぬと云ふことにもなりますか。」

○「然し一面から云へばさうも云へます。従つて困らないものには念佛は不用のものです。けれども、本當に困らぬとはどんなことを云ふのでせう。如來の心から見られたとき、私共のやうな、困りきれぬと云つてさへ困つてゐるほどの者を見たとき、それで完全と云へるでありませうか。寧ろさう云ふ人は本當の念佛が必要かも知れませんね。」

□「けれども近頃の私には念佛が有難く感じられないのは實際です。これはどうしたらよいのでせうか。」

○「私もそのことでは永らく非常に悩んだことがあります。乍然その結果、有難く感じられない念佛にも色々場合があります。必ずしも同じ場合のみではありません。嘗て私の老師はそれに對して、その時その場合に應じて色々細かい注意を興へて下れましたが、私の考へでは念佛と云ふものは私共のやうな普通の凡夫が凡夫のまゝで淨土に往生のできる爲めのものだから、どんな場合にかかはらずたゞ念佛さへ申せば往生ができると云ふのが淨土宗の極意だと申されました。之は非常な老師の遠見だと私は今にそのことを喜んで居ります。念佛申す外に色々条件がつくことは反つて凡夫の迷ふところであり、又凡夫としてはできないのが本當かも知れません。そして、そこにまた所

謂凡夫たる理由もあるのでありませう。念佛申す以外にはこちらの方のはからいをせぬと云ふのが法然上人の念佛です。だから、上人も「念佛は生れつきのまゝで申す念佛がよい、善人は善人ながら念佛し、悪人は悪人ながら念佛して往生はするなり」と申されて居ります。妄想雜念が起つても、それは凡夫の持ちまへだからと氣にせず、そのまゝで念佛すれば如來の慈光を蒙るので、自ら有難くもなるのでせうと思ひます。だから結局は念佛申すのが何よりです。念佛して有難いとか、有難くないなどと云ふことは往生の爲めには何も大したことはないのですからね。」

□「でも、念佛申す方から云へば大したことでせう。有難いと感じられるときは念佛も自ら進み、有難くないときはさつぱり念佛申す氣にもなれないのですから。」

○「それは凡夫の常として、私共には又無理からぬことに違ひありません。そして、その点は私共も同感であります。また一方から考へて見れば有難くもないやうなときこそ一層に注意してやらぬと反つて恐しいことになりすからね。だから私には念佛が心から喜ばないやうなときこそ、之ではいかぬと一層御別時でもせねばならぬとの用心をするのです。さうすると必ず二日三日、或は四日五日と立つうちには必ず衷心から

の念佛をせずにはゐられない氣分になります。之に反して念佛がいそいそと申されるときには別に御別時の

必要もないのでありますが、そんな時ばかりはないのですからね。」(一九三〇、五、一六—一六、六再校)

日誌の中より

神戸 故藤 村 健 三 氏

聖者我が土屋上人に遇ひ道を聞く、一生に記念すべき多幸なりし大正十四年を送り、より幸多く意義あらん事と望む大正十五年は、さし出る初日と共にやつてきた變化に富むだ自分自身が、眞生味を以つて如何なる年を暮すかと大なる希望と期待の心に胸は張り切る「静寂を破る木魚の響は宇宙と合してこゝろよき音楽となつて我耳に入る南無阿彌陀佛!!

學校の式后月江寺に行く。田舎坊主が落付かない態度でくだらぬ宗教談をやつてゐる。なまけない奴だ。歸宅すれば皆不在、母と共に信仰に就て語る。のんびりした正月だ。

〔二日〕

朝の祝膳を濟せて家を出る。毛布かついて梅田驛へ行く。小時待つうちに中川、堀江、野田氏來られ、共に乗車する。新入人年宗老人も共に長い旅は九時五十分より

始まる。晚四時半靜岡に着いた。これより前遙かに富士山は夕陽に照らされて、ピンク色にかゞやき、美なる事云わんかたなし。のろい電車で清水に着く。「土屋上人講演」のピラを見て心うれしく感じつゝ、實相寺に着く。夜、神戸秋葉氏、植野氏と話す。

〔三日〕

朝、本堂に行く。木魚の音に心おどる。座をしめて念佛する氣持は何とも云へぬ。木魚止む。「我が土屋上人」の南無の御聲を聞く。初めて来て居られし事に氣が付き急に自分の家に歸つた様な一種総てのものに對し懐しみを感じ觀喜雀躍す。聖人合掌して本堂を出らる。部屋に歸り皆に挨拶する。うるわしき我上人の顔を見た時、温顔一笑「久しぶりだね！何だかうれしい。それはとてもいい、あわし様がない。夕方頃から我上人姉の結婚問題に就き大に心痛され家に電報を打ち御心うれ

し、南無阿彌陀佛！

眞に結婚の意義は何處にあるか、吾人一生は肉慾的、經濟的、精神的の生活、結婚は精神的でなければならぬ。即ち、人は眞理と結婚するのである。眞理は永遠なり。然らば、又結ばれたる者も永遠である。我上人の結婚を重大視さるゝに驚く。到底自分等の豫想もせなかつた處である。實に一大教訓である。問題に就き一心不亂に熱烈に説かるゝ我上人の態度こそ眞に尊くもありがたききわみである。

〔略四日〕

上人の御諭しが一々次から／＼と頭に浮ぶ。家の事も心配になり出した。然しもし家に歸り結婚式未だなる時は、數多の反對者を前にしても、我は全責任をもつてこれに當らん事を堅く心に決した。自分のなし能ふ全部を出して我進まんとする所を強く貫通する事に決心した。今となつては最早年齢の問題はない。眞理の前に立たんとする者に年の區別は無いのである。我上人の熱心なる御志の通するやうに早く家にとかへりたし。さりとてこの場を去るのは惜しい。心ゆくまで念佛がとなへたひ。夕方藤村夫人（神戸）來らる。いととなつかし。上人と共に基金を得る事に就て色々と話した。

〔六日〕

單に死人を取り扱うを以て職分となす者を稱して僧侶となし居るのではないか。佛教にて世界改造どころか、世界と全く没交渉の有様ではないか。世界の人をして佛教の眞意義を知らしめるべし、現在僧侶を教育すべし、寺院を大に世界的に利用すべし、然らざれば破壊せよ。我眞生同盟の現在の急務は傳導にあり。單に現在少數の加盟者のみが念佛して居るのみにあらず。この世界にかくの如き美しき境地ある事を何故全力を注いで世界人に知らしめないのか、我々は共に奮闘せねばならぬ。

〔十六日〕

今日は我が土屋上人が久しぶりにて此地大阪に來られる事となつたので、思ひ切り友達を引張つてやらうと思つたがだめだ。わからぬ奴ばかりだつた。一人放課后橋本、早川、中島、御地、大浦等が月江寺に來り、ワイ／＼さわいで歸つた。夕方七時前後四十分程清水町に待つ。長尾一人だけ來る。共に豊田氏宅に向う。橋本氏岩崎氏の話ありて、岩崎氏はこの次の光明に出して圓平寺便所不在燈から燈の價值を感じ、更に太陽より如來の光明を感ずべき順序で話しあり。

米田兄より開會の辭あり、我土屋上人立たる。これより一番先豊田氏の眞生同盟誓言の發表あり。上人もこの

大阪よりの同行者年宗氏が自分の母校中之島小學校の教師であつた事に氣付て驚く。午の休みに皆一同寫眞を撮る。夕方からいよ／＼野田氏と共にこの清水を別れる事になつた。正に座談會が初まらんとする時、皆におしい別れをなし、御上人にも！實相寺の人繰出の大層な御見送りの中に花々しく寺を出た。うれしいなつかしいおしい靜岡まで汽車で行き、眼鏡店に於て上人の紹介にて荷物をあづけ、靜岡の町を一時間ならずして全部を見物す。松永君に合す。されど汽車満員にて間席を同じくする能はず、くれ／＼も残念。京都にて野田氏と同席になり、結婚問題に就き共に助力せらるゝ旨語り合ひ、大阪に着す。

〔七日〕

家に歸ればまだ門戸閉す。ノックして入れば母「歸つたか」の言葉に胸一ぱいになる。常ならざる家の様子に自分は唯心くるわしきのみ。「結婚してしまつた」總ての話しをき、萬事休す！我胸ははりさけるやうであつた。「式」形式上のものが何になるか。しかし平常をよそほいつゝあつた自分の修養をよろこぶ。時來り彼に話す事もあらん。

〔ある日〕

世の多くの人々、今は全く佛教をほきちがへて居る。

眞生同盟に祝言あり、まさに宇宙の理想を我が理想とし、現世界に一大活躍せんとする所、こゝに眞に眞生同盟の意義ある事。「昏睡状態にある佛教は今や省みる余地なし」を知らざる人の頭に覺鐘は全宇宙を覆ひてひびきわたらんとす。

〔十七日〕

今日は例により午前中尼ヶ崎圓平寺に上人を問はんこせしが時間なしやめ、午から貞松院へ行く。谷口氏とかの告別式を兼ね塾生澤山來て居つた。總數百二十余と云うふから驚くにたる。午からの分は主として女性に就てゝあつた。即ち婦人の修養と云うふ事である。夕方から母來らる。念佛の意義に就て上人の話あり、午后の分の前に曾我尾氏の眞に人のなすべき善事とは如何なるものであるか、前生の悪事は必ず今世に來る事、最後に「我等前生にたしかに善事をなしたり故に我等今偉大なる人格と篤學の土屋上人に遇う事を得たり」と米田兄拍手する、うれしかつた、曾我尾氏はをらゝ。

〔十月三十日〕

あゝ、記念すべき今日の日。俗悪を露骨に臆面もなく語る世界の中で、すがらんとする大木は皆根の無い唯節りであつた。親友とはしつかりと偽悪は以て結ばれたものであつた。この俗惡醜の生活を返つて樂んで居る奴許

りであつた。こんな醜い社界の中に、こんな美しい社界があるかと驚いた日！ あゝ、去年の今日はその社界に向つた日。

我が敬愛する眞の兄米田兄に伴はれて、信仰の世話へ價值の生活への第一步を得生寺に踏んだ日なのである。

ああ！ 始めて智慧と慈悲とにまします如來に合掌せし日。

我が土屋上人に始めて親しく御話をうけ給つた日！ あゝ、去年の今日麗はしの社會を見る。

會我尾氏今日始めて話してくれたのだ。そして今日に至るまで最も親しくして頂きながら、早やくも一年を過

した。あゝ思ひ出せばこの日の嬉しさ。

中學時代の日誌に「俺を眞に導いてくれる者はない」と斷言して居たが、今日始めて余の眞の兄會我尾氏を發

見したのである。氏の向上せんとする不斷の努力と、人をも同じ大道に立たしめんとする美しい心に、唯敬心の

おこらざるを得なかつた。市岡氏、橋本氏それ我が圍々は光明の兄許りだ。思ひはまぎ／＼とあのお別時の事共にくりかへさる。信仰生活への第一步、人生への眞に醒

めんとする第一步を去年の今日は踏んだのだ、初めて南無阿彌陀佛と宇宙大生命に唱へたのだ。

吾朋便り

□渡邊八右衛門様より

唐澤山御別時に付きまして早速察原様黒丸様より上諏訪町同入方へ依頼狀御差出し願様申上りました。又私方よりも法光

寺及諏訪同人へ御願狀差上候處本日法光

寺様より御承諾の旨御返事頂き候間御話

しの如く七月廿三日より一週間に御決定

御發差支へなきと存じ候

本年も原様始め小生も是非御伺申度今より準備在罷候 今年こそは眞劍に御念佛

さして頂きたいと思ます。

□藤村章様より

御上人様御興御子様方、御機嫌麗は

しゝあらせられますか、御伺ひ申上

す。一昨廿一日、専修寺様、円平寺様、

前日に橋本様などお見へになりまして、

御上人様此頃は御勸強遊ばして御座るか

など、御聞き申上りました事とございま

す。來月には名古屋まで御越し遊ばしま

すやう承つて居りますが、御尊顔に接す

る日が御座いますでしようか御なつかし

く存じ上ります。故健三の日記大正十五年

の分見出しました。御わすらわしくとも

御いとまの御時間に御らん遊ばして頂き

たう存じます。終始一貫信仰の事ばかり

でございますが、なかゝら拔萃いたした

ものでございます。私は死後小供達が親

の事を忍んでくれるやうに忠實に三十年

間かゝり日記をつけましたが、視てく

れるべき者は先へ逝きまして、かへつて

我子の日記をひらき、ありし日の思ひ出

に涙を新にいたして居ります。先へ参り

まして仕合かとも存じますが矢張健康で

生きて眞生の爲に働いてくれたらごれだ

けうれしいかとも思われてなりません。

本年は誠に氣候不順でございます。御

尊體御自愛遊ばして頂きますやう御興様

へ宜敷御傳へ願ひ上ります。合掌

□大垣市 淺野寅治郎様より

南無阿彌陀佛

過日は久方振り佐屋での御目もじ、誠に嬉しく存じ申候 本日越後の渡邊様御來遊本年の唐澤山の御話相成日並云々の事度々申候 昨年は二十二日より開日と相成居り二十一日まで學校の用事に二十三日よりは頗る宿屋に付可相成は二十三

日よりと御變更相願度様申上げ候處原様

も御在京中に付早速其旨御上人様へ御願

ひ申上げて見てはその御言葉により取急

ぎ右御願申上候先は右迄 合掌

□杉本壽博様より

只今は御弔詞御香資に預りまして有り

難う存じます。壽延儀存命中は一方ならぬ

御懇情に御指導にあづかり千萬有り難く

深く御禮申上ります。病中にも度々御尋ね

下さいまして御心に相かけ下さいました

事は本人初め私もいつも感謝をいた

して居りました。丁度本年二月中頃より

追々よろしくなりまして是れなれば存

じて居りましたが、本月初めより又少し

く悪く相成りまして、如何した者か存

じて居ります。折柄八日午後四時頃に大

變なひきつけが起りまして、人事不省に

相成り醫者の手あても其効なく、只注射

するのみにて水一滴もをらす只頭をひ

やすのみにて如何とも致し方なき旨醫師も申され、たゞ／＼死期の近づくのみなれば近親の者も皆御念佛を稱へつ、看病をいたして居りました。丁度十五日の午後二時頃より御念佛口調に口びるが動き

出しましてほごなく聲を出して御念佛す

る様になりました。其時の私共家族は正

念臨終出来る事と存じまして斷腸の思ひ

中にござれだけうれしく存じましたか、ほ

んごに如來光明來迎攝取に預りし事と深

く信じて悦びました次第。それよりお

ひ／＼呼吸はげしくなりましてが時々口

びるがお念佛する様に動きまして、午後

の九時三十分にはんごにねむる様に命終

いたしました。

思へば彼の人生はすかでは御座いまし

たが、御上人の御蔭にてあゝ、た娘達に

深き因縁を結ばせて頂きました事は私と

して此上もなき悦び、又其れが私のなく

さめ思ひひらきと存じまして、能くもあ

れ丈眞劍に働いた事と彼に向つても謝し

て居ります。

何卒御上人前述の様な臨終の有様でござい

ましたからどうぞ／＼御安心下さいませ。壽延の兄姉妹なども此の有様を見て尙一層よく御念佛をいたす様に相成共に中に中陸の弔をいたして居ります。是皆御指導のおかげと存じ此に改めて御禮申上ります。何卒大阪へ御來阪の節は相變

◎本月の集り 土屋觀道出席

- 十五日 大垣市 円通寺 晝
- 十六日 大阪市 豊田省三樓 夜
- 十七日 尼ヶ崎市大物 円平寺 夜
- 十八日 神戸市 極樂寺 (豫定)
- 十九日 岐阜市 道友の宅 (豫定)
- 廿、廿一、廿二日 名古屋市中 徳寺 三昧會
- 廿三日 焼津町 光心寺 夜
- 廿五日 東京市岩本町三〇 越後屋佐藤氏方 夜六時より

唐澤別時三昧會

七月二十三日より七日間

◎詳細は來月號にて御承知下さい

誌代拂込者御芳名

- 壹圓 岐阜山村ちづ様。○貳圓 浦賀黒岡仁太郎様。○參圓 三重西川さかへ様。○四圓 參拾錢 和歌山小阪信孝様。

(大正十四年八月十三日 第三種郵便物認可)

昭和五年六月十七日印刷納本
昭和五年六月二十日發行

(毎月一回十二日發行) 第九卷第六號

價定誌本	註文の注意
一部金十錢 郵税共 半年金六十錢 全 一ヶ年金一圓 全	<p>◎購讀希望者は代金を添へて御申込下さい</p> <p>◎誌代は總て前金御拂込の事</p> <p>◎送金は振替によるのが便利 です</p>

昭和五年六月十七日印刷納本
昭和五年六月二十日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 編輯人 土屋觀道

名古屋市中區隅田町二番地

印刷人 百々治之助

電話四(五)二九三番

名古屋市中區鍋屋町二丁目

印刷所 龍山田活版印刷所

電話東(4)三六五・壹壹

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番